

しっかり者のすずの兵隊 (DEN STANDHAFTIGE TINSOLDAT)

著：ハンス・クリスティアン・アンデルセン (Hans Christian Andersen)

訳：楠山正雄

あるとき、二十五人すずの兵隊がありました。二十五人そろってきょうだいでした。なぜならみんなおなじ一本の古いすずのさじからうまれたからです。みんな銃剣をかついで、まっすぐにまえをにらめていました。みんな赤と青の、それはすばらしい軍服を着ていました。ねかされていた箱のふたがあいて、この兵隊たちが、はじめてこの世の中でできたことばは、

「やあ、すずの兵隊だ。」ということでした。このことばをいったのはちいちゃな男の子で、いいながら、よろこんで手をたたいていました。ちょうどこの子のお誕生日だったので、お祝にすずの兵隊をいただいたのでございます。

この子はさっそく兵隊をつくえの上にならべました。それはおたがい生きうつしににいていますが、なかで、ひとりが少しちがっていました。その兵隊は一本足でした。こしらえるときいちばんおしまいにまわったので、足一本だけすずがたりなくなっていました。でも、この兵隊は、ほかの二本足の兵隊同様、しっかりと、片足で立っていました。しかも、かわったお話がこの一本足の兵隊にあったのですよ。

兵隊のなんだつくえの上には、ほかにもたくさんおもちゃがのっていました、でもそのなかで、いちばん目をひいたのはボール紙でこしらえたきれいなお城でした。そのちいさなお窓からは、なかの広間がのぞけました。お城のまえには、二、三本木が立っていて、みずうみのつものちいさな鏡をとりまいていました。ろうざいくのはくちようが、上でおよいでいて、そこに影をうつしていました。それはどれもみんなかわゆくできていましたが、でもそのなかで、いちばんかわいらしかったのは、ひらかれているお城の戸口のまんなかに立っているちいさいむすめでした。むすめはやはりボール紙を切りぬいたものですが、それこそすずしそうなモスリンのスカートをつけて、ちいさな細い青リボンを肩にゆいつけているのが、ちょうど肩掛のようにみえました。リボンのまんなかには、その子の顔ぜんたいぐらいあるぴかぴかの金ばくがついていま

した。このちいさなむすめは両腕をまえへのぼしていました。それは踊ッ子だからです。それから片足をずいぶん高く上げているので、ずずの兵隊には、その足のさきがまるでみえないくらいでした。それで、この子もやはり片足ないのだろうとおもっていました。

「あの子はちょうどおれのおかみさんにいいな。」と、兵隊はおもいました。「でも、身分がよすぎるかな。あのむすめはお城に住んでいるのに、おれはたったひとつの箱のなかに、しかも二十五人いっしょにほうりこまれているのだ。これではとてもせまくて、あの子に来てもらっても、いるところがありはしない。でも、どうかして近づきにだけはなりたいものだ。」

そこで兵隊は、つくえの上ののっているかぎタバコ箱のうしろへ、ごろりとあおむけにひっくりかえました。そうしてそこからみると、かわいらしいむすめのすがたがらくに見えました。むすめは相かわらずひっくりかえりもしずに、片足でつり合いをとっていました。

やがて晩になると、ほかのずずの兵隊は、のこらず箱のなかへ入れられて、このうちの人たちもみんなねにいきました。さあ、それからがおもちやたちのあそび時間で、「訪問ごっこ」だの、「戦争ごっこ」だの、「舞踏会ぶとうかい」だのがはじまるのです。ずずの兵隊たちは、箱のなかでがらがらいいだして、なかまにはいろいろとしましたが、ふたをあけることができませんでした。くるみ割はとんぼ返りをうちますし、石筆せきひつは石盤せきばんの上をおもしろそうにかけまわりました。それはえらいさわぎになったので、とうとうカナリヤまでが目をさまして、いっしょにお話をはじめました。それがそっくり歌になっていました。ただいつまでも、じっとしてひとつ場所をうごかなかったのは、一本足のずずの兵隊と、踊ッ子のむすめだけでした。むすめは片足のつまさきでまっすぐに立って、両手をまえにひろげていました。すると、兵隊もまげずに、片足でしっかりと立っていて、しかもちっともむすめから目をはなそうとしませんでした。

するうち、大時計が十二時を打ちました。

「ばん。」いきなりかぎタバコ箱のふたがはね上がりました。

でもなかにはいっていたのは、かぎタバコではありません。それは黒い小鬼でした。そら、よくあるバネじかけのびっくり箱だったのです。

「おいすずの兵隊、すこし目をほかへやれよ。」と、その小鬼こおにがいました。

でも一本足の兵隊はきこえないふうをしていました。

「よしあしたまで待つてろ」と、小鬼はいいました。

さて明るる朝になってこどもたちが起きてくると、一本足の兵隊は、窓のうえに立たされました。ところでそれは黒い小鬼のしわざであったか、風が吹きこんで来たためであったか、だしぬけに窓がばたとあいて、一本足の兵隊は、三階からまっさかさまに下へおちました。どうもこれはひどいめにあうものです。兵隊は、片足をまっすぐに空にむけ、軍帽と銃剣を下にしたまま、敷石しきいしのあいだにはさまってしまいました。

女中と男の子は、すぐとさがしにおりて来ました。けれども、つい足でふんづけるままでにしながらみつけることができませんでした。もし兵隊が大きな声で「ここですよ。」とどなったなら、みつけたかも知れなかったのです。けれども兵隊は、軍服の手まえ、大きな声でよんだりなんかにしてはみつともないとおもいました。

するうち雨が降りだしました。雨しずくがだんだん大きくなって、とうとうほんとうのどしゃ降りになりました。雨が上がったとき、ふたり町のこどもがでて来ました。

「おい、ごらんよ。すずの兵隊がいるよ。舟にのせてやろう。」と、そのひとりがいいました。そこでふたりは、新聞で紙のお舟をつくりました。そしてすずの兵隊をのせました。兵隊は新聞のお舟にのったまま、みぞのなかをながされていきました。ふたりのこどもはいつしよについてかしながら手をたたきました。やあ、たいへん。みぞのなかはなんてえらい波が立つのでしよう、流の早いといったらありません。なにしろ大雨のあとでした。紙の小舟は、上下にゆられて、ときどきくるくるはげしくまわりますと、すずの兵隊はさすがにふるえました。でも、やはりしつかりと立って、顔色かおいろひとつ変えず、銃剣肩に、まっすぐにまえをにらんでいました。

いきなりお舟は、長い下水げすいの橋の下へはいつていきました。それで、箱のなかにはいつていたときと同様、まっ暗になりました。

「いったい、おれはどこへいくのだ。」と、兵隊はおもいました。「そうだ、そうだ。これは小鬼こおにのやつやつのしわざなのだ。いやはや、なさけない。あのかわいいむすめが、いつしよにのつていてく

れるなら、この二倍もくらくても、ちっともこまりはしないのだが。」

こうおもっているところへ、ふと下水の橋の下に住む大きなどぶねずみがでて来ました。

「おい、通行証はあるか。」と、ねずみはいいました。「通行証を出してみせろ。」

でも、すずの兵隊は、だんまりで、よけいしつかりと銃剣をかついでいました。お舟はずんずん流れていきました。ねずみはあとから追いかけて来ました。

うツふ、ねずみはきいきい歯ぎしりして、わらくずや木切れに、どんなによびかけたことでしょうか。「あいつをおさえろ。あいつをおさえろ。あいつは通行税をはらわれない。通行証もみせやしない。」

でも、流れはだんだんはげしくなりました。やがて橋がおしまいになると、すずの兵隊は、目の見ることができました。でもそれといっしょにごうツという音がきこえました。それはだいたんな人でもびっくりするところです。どうでしょう、ちょうど橋がおしまいになったところへ、下水が滝になって、大きな掘割に流れこんでいました。それは人間が滝におしながされるとおなじようなきけんなことになっていたのです。

でももうとまろうにもとまれないほど近くまで来ていました。舟は、兵隊をのせたまま、押し流されました。すずの兵隊は、でも一生けんめいつぱりかえっていて、それこそまぶたひとつ動かしたとはいえませんが。お舟は三四ど、くるくるとまわって、舟べりまでいっばい水がはいりました。もう沈むほかはありません。すずの兵隊は首まで水につかっています。お舟はだんだん深く深く沈んでいって、新聞紙はいよいよぐすぐすにくずれて来ました。もう水は兵隊のあたまをこしてしまいました。そのとき兵隊は、かわいらしい踊ッ子のことをおもいだして、もう二どとあうこともできないとかがえていました。すると兵隊の耳にこういう歌がきこえました。

さよなら、さよなら、兵隊さん、

これでおまえもおしまいだ。

ちようどそのとき新聞紙がやぶれて、すずの兵隊は水のなかへ落ち込みました。——ところが、そのとたん、大きなおさかなが来て、ぱっくりのんでしまいました。

まあ、そのおさかなのおなかのなかの暗いこと。そこは下水の橋下よりももっとまっ暗でした。それになかのせま苦しいといったらありません。でもすずの兵隊はしっかりと立って、銚劍肩につっぱりかえっていました。

おさかなはあっちこっちとおよぎまわりました。それはさんざん、めちやくちやに動きまわったあと、きゆうにしずかになりました。ふと、稲妻いなづまのようなものが、さしこんで来ました。かんあかるいひる中でした。たれかが大きな声で、

「やあ、すずの兵隊が。」といいました。

おさかなは、つかまえられて、魚市場へ売られて、買われて、台所へはこぼれて、料理番の女中が大きなほうちようで、おなかをさいたのです。女中は、そのとき兵隊を両手でつかんでおへやへ持っていきますと、みんなは、おさかなのおなかのなかの旅をして来たためずらしい勇士をみたがってさわいでいました。でもすずの兵隊はちっともとくいらしくはありませんでした。みんなは兵隊をつくえの上へのせました。すると——どうでしょう、世の中にはずいぶんな奇妙なことがあるものですね。すずの兵隊は、もといたそのへやへまたつれてこられたのです。兵隊はやはりせんせんの男の子にいました。おなじおもちゃがそのうえにのっていました。かわいい踊ッ子のいるきれいなお城もありました。むすめはやはり片足でからだをささえて、片足を空にむけていました。この子もやはりしつかり者のなかまなのでした。これがすつかりすずの兵隊のころをうごかしました。で、もう少しですずの涙をながすところでした。でも、そんなことは男のすることではありません。兵隊はむすめをじっとみました。むすめも兵隊の顔を見ました。けれどおたがいになんにもものはいいませんでした。

そのとき、ちいさい男の子のひとりが、すずの兵隊をつかんで、いきなりだんろだんろのなかへなげこみました。どうしてこんなことになったのか、きつとかぎタバコの黒い小鬼こおにのしわざにちがいありません。

すずの兵隊はあかあかと光につつまれながら立っていました。そのうち、ひどいあつさをかんで来ました。でもこのあつさはほんとうの火であつたのか、心臓のなかの血がもえるのであつたのか、わかりませんでした。やがてからだの色はすっかりはげてしまいました。でも、これも長旅のあいだでとれたのか、心のかなしみのためにはげたのか、それもわかりません。兵隊は踊子の顔をみました。むすめも兵隊を見返しました。そのうちからたがとろけていくようにおもいました。でも、やはり銃剣肩に、しつかり立っていました。そのとき出しぬけに戸がぱたんとあいて。吹きこんだ風が踊子をさらいますと、それはまるで空をとぶ魔女まじよのようにふらふらと空をとびながら、だんろのなかの、ちょうど兵隊のいるところへ、まっしぐらにとびこんで来ました。とたんに、ぱあっとほのおが立って、むすめはきれいに焼けうせてしまいました。するうち、すずの兵隊は、だんだんとろけて、ちいさなかたまりになりました。そうして、あくる日女中が、灰をかきだしますと、兵隊はちいさなすずのハート形になっていました。けれども踊子のほうは、金ばくだけがのこって、それは炭のようにまっくろにこげていました。

底本…「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力…大久保ゆう

校正…秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。